

エウリーピデース『バッカイ』1039-40行における $\mu?$... ? の機能について

その他のタイトル	The function of $\mu?$... ? in Euripides, Bacchae, 1039-40
著者	中川 未来
雑誌名	東京大学西洋古典学研究室紀要
巻	9
ページ	47-63
発行年	2015-12
URL	http://doi.org/10.15083/00078901

エウリーピデース『バツカイ』1039-40 行における μὲν...πλήν の機能について*1

中川未来

エウリーピデース『バツカイ』の1039-40行は、テーバイ王ペンテウスの死を報告する第二の使者と、その知らせを受け取るコロス（小アジアから来たバツカイたちから成る）との間で交わされる応答の一部である。本文と和訳は以下のようにになっている*2。

Αγ. συγγνωστὰ μὲν σοι, πλήν ἐπ' ἐξειργασμένοις
κακοῖσι χαίρειν, ὧ̃ γυναῖκες, οὐ καλόν. 1040

そう言うのもっともだが、不幸な
出来事を喜ぶのは、おまえたち、誉められたことではないぞ。

ペンテウスの死に触れ歓喜の様子を隠さないコロスを、使者が自らの価値観を表明しながら諫める場面である。原文の構造を観察してみると、この一文を構成する二つの節は、少なくとも悲劇においては珍

*1 本稿の作成にあたっては、本紀要の編集責任者と匿名の査読者から数々の重要なご指摘を頂いた。感謝とともにここに記す。本稿に残る不備は全て筆者の責任によるものである。

*2 エウリーピデース作品の本文は、別途記載がない場合は Diggle による OCT を引用する。また、和訳は以下も含め全て筆者による。

しいといえる*³μὲν...πλήν 構文によって接続されている。本稿は、この μὲν...πλήν 構文の機能を類例や既存の解釈を検討することで推察し、また、この構文が「使者の諫言」という本箇所役割にどういった影響を与えうるかを論じるものである。

1. 既存の解釈の整理

Denniston による *The Greek Particles* (以下 Denniston と表記) では、『バツカイ』1039 行の μὲν は III. Preparatory, (4)The contrasted idea is not expressed in a following co-ordinated clause, (b)δέ clause*⁴ subordinate に分類されている。ここから判明するのは、Denniston は① μὲν...πλήν を μὲν...δέ 構文の一種だと捉えている、②多くの場合 μὲν 節と δέ 節は等位関係にあるが、本箇所では πλήν 節が μὲν 節に従属するとみなしている、の二点である。

一方、*A Concordance to Euripides* (以下 Allen & Italic と表記) の μὲν の項目においては、「δέ 以外の語を用いて μὲν 節に対応する節を導く」用例の中に本箇所を見つけることができる。他の表現としては μὲν...ἀτάρ, μὲν...μέντοι 等が含まれており、μὲν...πλήν に加えてこれらも μὲν...δέ 構文の一種であると認識されている。このことから、Allen & Italic によるこの分類は、Denniston の μὲν の項目における III. Preparatory, (1)Normal use*⁵, (β)μήν, μέντοι, ἀλλά, ἀτάρ, etc., are sometimes used instead of δέ

*³ Korf (1982) の追加異読表によると、Burgess が συγγνωστὰ μὲν σοι に対して ξυγγνώστ' ἄνην という修正読みを提示している。これはおそらく、μὲν を削除することであまり例のない μὲν...πλήν 構文を避けようとする処置であろう。Sandys (1900) の判断ではこの修正読みにはさほど価値がない。

*⁴ Denniston の脚注によれば、これは必ずしも δέ が導く節である必要はなく、μὲν 節の対概念を表す節を代表的に δέ clause と呼称しているだけである。よって、δέ そのものを含まない『バツカイ』1039 行にも、この分類は適用される。

*⁵ Denniston の言うこの Normal use とは、「μὲν が文法的に等位関係にある対句の一方を導き、逆接の小詞が他方を導いて後続する用法」である。その逆接の小詞の中でもっとも一般的なのが δέ であり、ἀτάρ や μέντοι もその一種となる。先に挙げた (4)The contrasted idea is not expressed in a following co-ordinated clause がこの

where a stronger adversative is required. の部分に相当すると考えられる。以上のことから、Allen & Italic は③ μέν...πλήν を μέν...δέ 構文の一種と理解する、④ πλήν はあくまで対比を強調するための δέ の代用であり、μέν 節と πλήν 節は等位関係であると考えている、ということが言える。

Denniston ①と Allen & Italic ③は全く同じ解釈で、形式上『バツカイ』1039 行の μέν...πλήν は μέν...δέ に相当するものだと両者とも判断している。理解に差が見られるのは二つの節の相互関係においてであり、Denniston は μέν 節を主節、πλήν 節を従属節とする従属関係を、Allen & Italic は互いの節の等位関係を見て取っているのである。

では、πλήν 節を μέν 節に対する従属節とする場合と等位節とする場合とでは。その意味にどういった差異が生まれるのであろうか。『バツカイ』1039 行における πλήν の意味や用法を検討しながら考察していく。

2. πλήν の用法

『バツカイ』1039 行で πλήν に後続する要素の構造を検証してみると、活用動詞が省略されてはいるものの、句ではなく節となっていることが明らかである。πλήν は接続詞として句と節の両方を導く能力を持つのだが、エウリーピデース作品において節を導く場合は、多くが以下のいずれかを満たしている。すなわち、① οὐ (あるいはそれを含む合成語) が πλήν に先行する、② πλήν の直後に他の接続詞*6を伴う、の二点である。①の場合、οὐ...πλήν の組み合わせで only ほどの意味になり、②の場合、εἰ, ἐάν, ὅταν, ὅσα を伴えば πλήν とあわせて二語で unless と解釈することができる。しかしながら、『バツカイ』1039 行に関しては、このどちらにも属さないことが明白である。節を導きながらこれらのいずれ

Normal use から外れるのは、「文法的に等位関係にある」という条件を満たさないためである。

*6 これらのうち LSJ と Allen & Italic が共通して取り上げているのは、εἰ, ἐάν, ὅταν, ὅσα, ὅτι の五語である。LSJ はさらに他の語にも言及しているが、ここでは扱わないこととする。

をも満たさない例として、本論で扱っている箇所他に、Allen & Italic は断片 833 番 2 行を挙げる。しかしこの箇所は読みの正統性が疑われている*7ので、『バツカイ』1039 行の並行例と見なすには難がある。したがって、「節を導く πλήν が οὐ やその合成語、あるいは ei などの接続詞を伴わない」例は、エウリーピデース作品においては管見の限り『バツカイ』1039 行のみなのである。

このような場合、πλήν はどういった意味を持つのであろうか。πλήν が他の接続詞を伴わずに節を直接導く例を用いながらその機能の幅と変遷を示し、『バツカイ』1039 行での用法を明らかにしていく。

(i) 基本となる用法「除外」

πλήν が節を導く場合の基本的な機能は、前置詞として用いられるときや、他の接続詞が後続するときと同じく「除外」である*8。具体例として、アリストファネース『リュストラテ』*95 行を以下に挙げる。

Λυ. νῦν δ' οὐδεμία πάρεστιν ἐνταυθοῖ γυνή·
πλήν ἢ γ' ἐμὴ κωμῆτις ἢδ' ἐξέρχεται. 5

でも今やこのあたりにはひとりの女もいやしない。

隣の彼女がこっちへやって来ている他にはね。

*7 Kannicht は *TrGF* において、エウリーピデース断片 833 番の本文を以下のように印刷する。

τίς δ' οἶδεν εἰ ζῆν τοῦθ' ὃ κέκληται θανεῖν, | τὸ ζῆν δὲ θνήσκων ἐστί; †πλήν ὅμως βροτῶν | νοσοῦσιν οἱ βλέποντες, οἱ δ' ὀλωλότες | οὐδὲν νοσοῦσιν οὐδὲ κέκτηνται κακά
施された注釈によれば、この πλήν は nisi あるいは tamen ほどの意味を持つが、後続する ὅμως とあわせて様々な修正案が提示されている。この点については注 11 を参照のこと。

*8 ἀλλά と類似した前置詞、接続詞として機能する πλήν については Kühner & Gerth (1966) の §534, Anmerk. 5 と §540, Anmerk. 5 を、また、πλήν の前置詞から接続詞への機能の拡大については Schwyzer (1966), pp. 542-3 をそれぞれ参照のこと。

*9 本文は Wilson 編 OCT より引用する。

前述の通り、エウリーピデースにおける用法でも、πλήν は οὐ あるいはその合成語に後続することが多々ある。その場合の機能は「除外」であり、結果的に πλήν 以下の内容に焦点を当てることになる。『リュシストラテ』5 行でも、唯一残った女性である主人公の隣人を物語に導入する役割を果たす。ここで強調しておきたいのは、「除外」は「逆接」と表裏一体の機能だということである。「もう誰も残っていない。隣人が出てくるのを除いては」が表すのは、「もう誰も残っていない。しかし隣人が出てきている」と述べた場合と同じ事実である。

(ii) 「除外」と「逆接」

節を導く πλήν の機能が「除外」とも「逆接」とも解釈できることは、(i) で示した通りである。以下では、ソフォクレス『トラキーニアイ』¹⁰41 行を例示しながら、これら二つの機能の重なりを検証してみる。

Δη. ξένω παρ' ἀνδρὶ ναίομεν, κείνος δ' ὅπου 40
βέβηκεν οὐδεις οἶδε· πλήν ἐμοὶ πικρὰς
ὠδῖνας αὐτοῦ προσβαλὼν ἀποίχεται.

私たちはよく知りもしない人のもとに住んでいるのですが、彼がどこにいるのかは誰も知りません。ただ、彼を想う激しい苦しみを私にもたらして去ってしまうのです。

ここでも πλήν は οὐ の合成語を伴っているが、(i) との大きな差異は、πλήν 節が οὐδεις から「除外」されるものを直接説明しているわけではない点である。οὐδεις...πλήν の構文から予想されるのは、例えば「彼の行方は誰も知らない。～が知っているのを除いては」といったものになるだろうが、実際には「彼の行方は誰も知らない。私に苦しみを与えて行っ

¹⁰ 以下、ソフォクレス作品の本文は、Lloyd-Jones&Wilson 編 OCT より引用する。

てしまうことを除いては。」となっている。つまり、実際に「除外」されているのは、「彼の行方を唯一知っている誰か」ではなく「私が唯一知っていること」なのである。ここに「逆接」の意味を適用すれば、「彼の行方は誰も知らない。しかし私に苦しみを与えて行ってしまう（ことは確かである*11）」となり、文意はより通りやすいように思われる。総括すると、この用例は、形式上は οὐδείς...πλήν の明瞭な「除外」を表す構文であるが、意味上はその構文に対応した厳密な「除外」の文ではなく、「逆接」寄りの傾向を示していると解釈できると言える。

(iii) οὐ を伴わない場合

上述の二例から分かるのは、οὐ...πλήν の構文は、少なくとも形式的には「除外」の構文の典型例だということである。次に、οὐ を伴わずに節を導く πλήν が持つ機能を、ソフォクレス『コロノスのオイディプース』1643 行を用いて考察する。

Αγ. ἄλλ' ἔρπεθ' ὡς τάχιστα· πλήν ὁ κύριος 1643
Θησεὺς παρῆστο μανθάνειν τὰ δρώμενα.

さあ、早く去るのだ。ただテーセウスは、
そうしてしかるべきなのだから、ここにいて事の成り行きを知って
くれ。

オイディプースが子供たちに対して発した言葉を回想する使者の台詞

*11 この補いがあれば、文意はより明確になろう。Easterling (1982) はこの πλήν の機能を 'but one thing I do know...' という英訳をもって解説し、また、Mazon は Dain (1981) 内で 'La seule chose sûre, c'est que...' と訳出する。πλήν が生み出す対比は「行方を知らない人と唯一知っている人」ではなく、「誰にも知られていないことと唯一知られていること」なのである。また、上述のエウリーピデース断片 833 番 2 行において、Hense は πλήν ὁμοῦς に代わり δῆλον ὡς を提案する。πλήν 以下の部分に「～は明らかだ」という意味を求めているのは明確で、「除外」あるいは「逆接」に加えてこのような機能を持つ πλήν も、ある一定数存在するのかもしれない。

であり、前半の「早く立ち去れ」と後半の「テーセウスには知らせろ」を結ぶのが接続詞 πλήν である。Kamerbeek(1984)によれば、前半部分において「テーセウス以外ここにはいけない」ということが暗に示されており、基本的な「除外」の機能を携えてはいると見える。しかしながら (i) や (ii) の場合とは大きく異なり、形式上「除外」の構文をとってはならず、何から何が「除外」されることを表すのが明白ではない。ここでも「逆接」の機能を適用し^{*12}、「早く立ち去れ。しかしテーセウスには知らせろ」と解釈すれば意味はより明確になる。加えて、より重要なのは、この πλήν が単なる「逆接」への機能の過渡期にある例だということ^{*13}である。(i) ではほとんど完全に「除外」であり、(ii) では「除外」でありながら「逆接」の可能性を示した πλήν であるが、ここではまず、οὐ (およびその合成語) を伴わないことで形式として「除外」の構文を失い、意味の面でも「逆接」への変貌を遂げはじめている。

(iv) 『バッカイ』1039行の πλήν

(i) から (iii) までの考察を踏まえ、ここでは本題の『バッカイ』1039行について検討する。まず、既述の通り、『バッカイ』1039行の πλήν には οὐ またはその合成語が先行しない。この点で形式上もっともこの例に近いのは、(iii) で示した『コロノスのオイディプース』1643行である。機能そのものはかすかに残しながらも「除外」の構文を取らず、ほとんど「逆接」といってよいこの πλήν が、『バッカイ』1039行の解釈にも適用可能なのだろうか。

^{*12} Lloyd-Jones(1994)はこの πλήν を ‘only’ と英訳し、また Kamerbeek(1984)も同じく ‘only’ と訳出する。この ‘only’ はもちろん「逆接」の接続詞であるが、接続詞 ‘only’ には「例外」を示す機能があることも忘れてはならない。「逆接」と「除外」(あるいは「例外」)はやはり表裏一体の機能であり、言語をまたいてもそれは変わらないのである。

^{*13} Kamerbeek(1984), p.222 を参照のこと。この注釈によれば後代にはこの機能がより一般的になり、例として挙げられているメナンドロス『デュスコロス』741行の πλήν は、ほとんど「除外」の機能を失っているように見える。

『バックイ』1039 行の *πλήν* が結ぶのは、前半部「あなたは許されよう」と後半部「他人の不幸を喜ぶのは良くない」の二節である。言うまでもなくこの *μὲν...πλήν* 構文は「除外」の形式を示さず、意味の面から考えても、「除外」として解釈すると「他人の不幸を喜ぶのは良くないということを除いては」となり、前半部との接続が判然としない^{*14}。一方、「逆接」と考えてみると「あなたは許されよう。しかし他人の不幸を喜ぶのは良くない」となり、文意は明白なものとなる。したがってこの *πλήν* は、(iii) で示した『コロノスのオイディプース』1643 行の例よりも、さらに「逆接」の機能を強く持っていると思われる。すなわち、すでに「除外」から「逆接」へ完全に移行している、とも考えられる^{*15} のだ。

πλήν が「逆接」であるという想定は、1 章で述べた Allen & Italic の解釈④の基盤になっている。*μὲν* 節と *πλήν* 節が等位関係にあると解釈されるのは、接続詞 *πλήν* が「除外」ではなく「逆接」の機能を有しているという前提^{*16}があってのことである。一方で、Denniston の解釈②か

^{*14} 仮に 1039-40 行が *συγγνωστά μὲν σοι, πλήν ἐπ' ἐξείργασμένοις | κακοῖσι χαίρειν, ὧ γυναικες* で終わっていれば、*πλήν* は動詞の不定形を伴うごく一般的な用法と解釈され、意味としても「他人の不幸を喜ぶのを除いては、あなたは許されよう」という完全な「除外」の文になる。あるいはエウリーピデースは当初この意図をもって書き始めたが、末尾に *οὐ καλόν* を加えたことによって破格的な文になったのかもしれない。破格構文と解釈し *πλήν* の機能を「除外」とすると、*μὲν...πλήν* 構文は成立せず、*μὲν* の機能は *solitarius* となる。破格文による *μὲν...δέ* の遮断は *μὲν* を *solitarius* と判断する典型的な要因の一つであり、『バックイ』1039 行にも当てはまるのかもしれない。しかし、本稿では Denniston や Allen & Italic の判断を前提に、あくまで *μὲν...πλήν* 構文を取っているという認識のもと、論を進めていく。

^{*15} LSJ で *πλήν* を検索してみると、最後の分類である B. III. 3. において「*δέ* の代わりとなる」機能が項目立てされている。紹介されている用例は、いずれもヘレニズム期あるいはそれ以降の作と推定されるものからであるため、『バックイ』1039 行がこの用法に相当すると直ちに判断することはできない。しかし、ヘーリオドロス『アエティオピカ』からの用例はまさに *μὲν...πλήν* の形を取っており、Hirschig (1856) では 'tamen' と訳される「逆接」の機能を果たす。後世においてこのような例が見られることは、*πλήν* の意味の変遷を考察するにあたり注目に値する。

^{*16} *πλήν* の機能別の視点から考えると、「除外」の意で理解することはすなわち *πλήν* 節を従属節と捉えていることを示すが、「逆接」の意とすることは等位節と捉える

らは、 $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ の機能を特定することができない*17。しかしながら、この章で考察してきたように、『バツカイ』1039 行の $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ を「除外」と解釈するには少々難がある。よって、ここでの $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ の機能は「逆接」であると推定しても誤りではないであろう。

ここで、1 章で提示した問題に立ち返ってみる。 $\mu\acute{\epsilon}\nu$ 節と $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ 節の相互関係を等位と見るか従属と見るかで、どういった意味の差異が発生するかという点であった。とはいえ、 $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ の機能が「逆接」であるとしている時点で、文意はほとんど完全に固まってしまっている。新たに差が生まれ得る観点とはいえば、どちらの節の内容により重きが置かれているか、あるいは他の相互関係を持ち得るかということになろう。文法的に等位関係にあるからといって、内容面での相互の関係がまったくの対等であるとは限らず、また、従属関係にあるからといって主節の内容が従属節よりも強調されているとは限らない。

Allen & Italic が『バツカイ』1039 行の $\mu\acute{\epsilon}\nu\dots\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ を、 $\mu\acute{\epsilon}\nu\dots\delta\acute{\epsilon}$ よりも強い対比を表現するための構文であると解釈していることは 1 章で示した通りである。 $\mu\acute{\epsilon}\nu\dots\delta\acute{\epsilon}$ で結ばれる対句が強い対照性を示すとき、多くの場合は $\delta\acute{\epsilon}$ 節の内容がより強調されるのだが、 $\mu\acute{\epsilon}\nu$ 節が強調される例も決してないわけではない*18。次の章では、文法面に加えて使用者の発言の背景などの内容面からも、 $\mu\acute{\epsilon}\nu$ 節と $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ 節のどちらにより重きが置かれているのか、あるいは何か異なる関係を持つのかを検証していく。

ことに直結しない。but を用いても though を用いても「逆接」は表現できるが、前者が導くのは等位節で、後者は従属節である。また、節の分類別の視点から見れば、等位節と判断することはすなわち $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ の機能を「逆接」と捉えることを意味するが、従属節と判断すれば「除外」と「逆接」のどちらの機能でもあり得る。

*17 上記注 12 を参照のこと。 $\pi\lambda\acute{\eta}\nu$ 節が従属節であるという判断しか示されていない状況では、Denniston がその機能をどう認識しているのか判然としない。

*18 Denniston, p. 370(ii) を参照のこと。なお、ここには「 $\mu\acute{\epsilon}\nu\dots\delta\acute{\epsilon}$ が持つ強い対比を明らかにするために、英語では片方の節を従属節として譲歩の意で訳すことがある」とも記されている。

3. μέν 節と πλήν 節—その関係性

(i) 文法的視点からの検証

μέν...δέ 構文で示される対句が強い対照性を持つとき、内容面での強勢が置かれるのは δέ 節の方であることが多いということは先ほど述べた通りである。Allen & Italicie において『バツカイ』1039 行と同じ項に分類されている一節、すなわち作者がより明白な対比を求めて δέ ではない語を用いているとされる箇所を例に挙げて、このことを具体的に検証してみる。以下はエウリーピデース『メーディア』83-4 行である。

Tr. ὄλοιτο μὲν μή· δεσπότης γὰρ ἐστ' ἐμός· 83
ἀτὰρ κακός γ' ὢν ἐς φίλους ἀλίσκεται.

滅んでしまえ、はやはりいけません。私のご主人様ですから。

それでも、ご家族に対して良からぬふるまいをするのは、ひどいことです。

メーディアの乳母がイアーソーンへの恨み言を吐露する場面である。ここで用いられているのは μέν...δέ 構文の一種 μέν...ἀτάρ であり、乳母がイアーソーンに「滅べとまでは思わない」けれども「家族を裏切った悪人なのは確かだ」と対照的な二つの感情を抱いている様子を示している。この台詞の直後、対話の相手である守役は「人間は誰しも周りの者より自分を大切にするものだ」との趣旨の返答をすることから、彼は乳母の発言の後半に着眼して言葉を返していることがうかがえる。つまり、この二行の中で最も重要な部分は後半の ἀτάρ 節なのである。

今度は、反対に、μέν 節がより強調されていると見なされる例を検証してみる。以下に挙げるのはソフォクレス『オイディプース王』673-5 行である。

Kr. στυγνός μὲν εἶκων δηλός εἶ, βαρὺς δ' ὄταν

θυμοῦ περάσσης, αἱ δὲ τοιαῦται φύσεις
αὐταῖς δικαίως εἰσὶν ἄλγιστα φέρειν. 675

君は譲歩するときはあからさまに不機嫌で、怒りで
心を満たすときは手ごわいのだな。そうした性質は、当然だが
自分自身にとって最もこらえがたいものなのだ。

クレオーンの追放を求め感情的になったことをとがめられたオイ
ディプースが、不承不承その怒りを収めたことに対するクレオーンの発
言である。Jebb (1893) はこの μέν...δέ 構文の意を ‘as thou art fierce in
passion, so art thou sullen in yielding’ と解釈し、内容としては μέν 節に
比重が置かれているとする*¹⁹。この発言の直前に取られた実際のオイ
ディプースの言動を描写しているのは μέν 節であり、δέ 節はあくまで
比較を目的として導入された節なのである。

μέν 節と δέ 節 (ἀτάρ 節) それぞれがより強調される例を一つずつ検
討してきたが、これら二種類の間には文法的にはこれといった差が見受け
られないことが分かる。二例とも同様に、μέν と δέ が各々節を導く構文
を取り対句をなしている。つまり、どちらの節がより重要であるかは、
前後の文脈や発言の背景にその判断のほとんどを委ねているのである。
したがって『バッカイ』1039 行に関しても、使者がより伝えたいこと
は μέν 節なのか πλήν 節なのか、内容面からの考察をもって推測する必
要がある。

(ii) 発言の背景からの検証

まずは『バッカイ』1039-40 行の使者の発言内容を改めて整理してみ
る。μέν 節内で述べられているのは「あなた(コロス)の言動は許され

*¹⁹ Jebb (1893), p. 94-5 参照のこと。文法的には μέν 節と δέ 節は等位関係にあるが、
強勢は μέν 節にあるとする。また、p. 66 の 419 行に対する注釈では、「英語ではど
ちらかを従属節で表現すべきところを、ギリシア語は直接的な対句を好むため等位
節で表現する」と解説する。これは注 18 で述べた Denniston による指摘と重なる。

るべきである」ということ、*πλήν* 節では「起きてしまった不幸を喜ぶことは良くない」ということである。「コロスの言動」は 1024 行において使者の入場により場面が転換して以降、1039 行までの間にコロスによってなされた発言や行動を指す。時系列に沿って並べると、使者に知らせの内容を尋ねる (1029 行)、ペンテウスの死を知り、高揚してディオニューソスに呼びかける (1031 行)、抑圧からの解放に歓喜する (1034-5 行)、ディオニューソスこそが自らの支配者だと宣言する (1037-8 行)、といった流れである。‘*συγγνωστά μὲν σοι*’ の部分のみを見れば、これらの言動が全て「許されるべきである」と使者が判断しているように解釈できる。

以上のような内容の *μὲν* 節に後続するのは、「逆接」の接続詞 *πλήν* に導かれる節である。「不幸を喜ぶことは良くない」というこの諫言は、複数の注釈者^{*20}が指摘するように、『オデュッセイア』22 歌 412 行^{*21}において、求婚者たちが成敗されたことを歓喜する乳母を諫めるオデュッセウスの発言と趣旨を同じくする。ホメーロスの時代の倫理観が、エウリーピデースの時代にも引き継がれており、一種の格言のように扱われていることがうかがえる類似である。しかしながら、Winnington-Ingram (1948) が指摘するように、この倫理観を持っているのはエウリーピデースと彼が描く使者であって、コロスには当てはまらない。Roux (1972)^{*22} と Segal (1982)^{*23}によれば、それはひとえにコロスが小アジア出身の非ギリシア人であるためだ。彼女たちがギリシア人ではなく、異国の方法

^{*20} Bruhn (1891), Dodds (1960), Seaford (1997)。

^{*21} Dimock (1995) による本文と、筆者による和訳は以下の通り。οὐχ ὀσίη κταμένοισιν ἐπ’ ἀνδράσιν εὐχετάσθαι。「人が殺されたのを喜ぶのは許されないぞ。」

^{*22} Roux (1972) は、『バッカイ』のコロスと同じように不幸に対して同情を見せない者の例として、メーディアとヘカペーを挙げる。前者は非ギリシア人で、後者は犬であるためという指摘がなされている。

^{*23} Segal (1982) は pp. 242-7 において『バッカイ』のコロスの特徴を説明する。主人公ペンテウスに味方する存在ではなく、ギリシア的価値観を持たない『バッカイ』のコロスを、エウリーピデース作品のコロスの中では特異な存在とする。

でペンテウスの死を喜んでいることは、1034行*24で使者に告げられる。したがって、使者も1039-40行の時点で既に、自らが対峙しているコロスがギリシアの倫理観の通用しない集団であると認識しているはずである。こうした相手に対する「不幸を喜んではいけない」という諫言は、どれほどの説得力を持つのであろうか。言い換えれば、使者は一体どこまで心からコロスの行いを諫めようとしているのだろうか。ここに、「あなたの言動は許される」と「不幸を喜ぶのは良くない」とで使者がより強調したかったのはどちらなのか、また、μὲν...πλήν 構文を取えて用いた意図は何であったかを読み取るための鍵があるように思われる。

この点に関する Winnington-Ingram (1948) の、使者はコロスの復讐*25を良しとする価値観に強い反感を抱いているとする考察に鑑みれば、「不幸を喜ぶのは良くない」に焦点が当たっていると考えられる。しかし、Seaford (1997) のように、1037-8行*26でディオニューソスの支配にコロスが言及したことで使者が目当たりにした神の力を思い出し、1032-3行*27での非難ほどの強い口調ではなくなっている、と指摘する注釈もある。1032-3行で「まさかペンテウスの不幸を喜んでいるというのか」と怒りをあらわにした使者が、1039行ではコロスの言動を「許される」とまで言うのである。この注釈を念頭に置くと、「あなたの言動は許される」は1039行で新たになされた発言であり、より重要度が高いと見なすこともできよう。

この考察を踏まえて、使者の発言をさらに追いかけてみる。1032-3行でコロスを強く非難した使者は、1039-40行ではわずかに譲歩の姿勢を

*24 εὐάζω ξένα μέλεσι βαρβάροις とコロスは宣言する。

*25 Winnington-Ingram (1948), p. 24, 108 を参照。コロスにとってペンテウスの死は、彼女らが崇拝するディオニューソスの力を認めなかったことに対して果たされた復讐である。

*26 ὁ Διόνυσος ὁ Διόνυσος, οὐ Θῆβαι | κράτος ἔχουσ' ἐμόν. と言ってコロスはディオニューソスの支配の始まりを印象付ける。

*27 πῶς φήσ; τί τοῦτ' ἔλεξας; ἢ ἔπι τοῖς ἐμοῖς | χαίρεις κακῶς πρᾶσσουσι δεσπόταις, γύνα; 「不幸を喜んでいるのか」と使者が怒りを見せる。1039-40行の πλήν 以下は、この部分を格言化した表現のようにも思われる。

見せる。次の発言は 1043 行からのペンテウスの死の状況説明であるが、興味深いのはこの後 100 行以上にわたるこの報告がコロスの要求*28に
 応じる形でなされた点である。使者は目撃したディオニューソスの力を
 改めて思い返し、それに屈服する*29ようにコロスの要求を即座に呑んだ
 のだと解釈できよう。

では、使者の本来の意図はやはり μέν 節にあって、πλήν 節での諫言は
 1032-3 行の繰り返しであり、形式的な忠告に過ぎないのだろうか。μέν
 節の内容、特に 1032-3 行での激しい怒りからの変化を考えると、使者
 はすでに非ギリシア的価値観しか持たないコロスに倫理を説くの諦めて
 しまったかのようにも見える。しかしながら、1 章と 2 章で示してきた
 ように、πλήν は μέν 節との強い対照性を示すために選択された「逆接」
 の接続詞である。使者の心の一方ではコロスの言動、ひいてはギリシア
 の外から来た神の力を認めながらも、他方ではギリシア的な倫理観を決
 して忘れてはいない。その対比を強く打ち出すための πλήν ではないか
 と筆者は考える。ディオニューソスに支配されようとする中でのギリシ
 ア的価値観の最後の抵抗がこの πλήν 節に含まれていることが、1039-40
 行での使者の発言の重要な点なのではないだろうか。

4. 総括

後世ではより一般的になる接続詞 πλήν の「逆接」の用法の初期の例
 を含むとして、エウリーピデース『バツカイ』1039-40 行の μέν...πλήν
 構文について検証してきた。πλήν 節を等位節と見なすか従属節と見な

*28 ἔννεπέ μοι, φράσον, τί νι μόρφ θηήσκει | ἄδικος ἄδικά τ' ἐκπορίζων ἀνὴρ; 1041-2 行
 でコロスにこう要求され、抵抗することもなく、次の行から使者は自らの主人の不
 幸を詳細に語り始める。1039-40 行の諫言を受けた直後にこの要求をするコロスの
 様子から、使者の諫言は何の効力も持たなかったことが明らかになる。

*29 Taplin (1978) は pp. 55-7 において、ペンテウスの無知を強調する。自らが置かれ
 た状況やディオニューソスの力に、彼は最後まで気が付かない。使者によるこうし
 た神の力の認識は、無知なるペンテウスをより一層浮かび上がらせる。

すかにかかわらず、この構文は二つの節の対比を強調するために用いられていると言える。μέν 節も、ディオニューソスの力の認識からコロスへの譲歩という使者の心境の変遷を示すための重要な役割を担っているが、使者の発言の中心となる節は πλήν 節であると筆者は考える。πλήν で導かれた格言的な言いまわしは、使者が自らの倫理観を表明する部分である。しかしこの発言は相手には全く聞き入れられず、使者の考えは明白に退けられる。そうした様子が表現されることで、ギリシア的価値観を語る πλήν 節の存在感は増すのである。

【参考文献】

- Allen, J. T., and G. Italie. (1954). *A Concordance to Euripides*, Berkeley.
- Arnott, W. G. ed. (1979). *Menander*, Vol. I, Harvard.
- Bruhn, E. (1891). *Euripides: Die Bakchen*, 3rd edition, Berlin.
- Collard, C., and M. Cropp. edd. (2008). *Euripides*, Vol. VIII, Harvard.
- Dain, A. ed. (1981). *Sophocle*, Tome I, 5th edition, Paris.
- Denniston, J. D. (1954). *The Greek Particles*, 2nd edition, Oxford.
- Diggle, J. ed. (1984). *Euripidis Fabulae*, Tomus I, Oxford.
- Diggle, J. ed. (1984). *Euripidis Fabulae*, Tomus III, Oxford.
- Dimock, G., and A. T. Murray. edd. (1995). *The Odyssey*, revised edition, Harvard.
- Dodds, E. R. (1960). *Euripides: Bacchae*, 2nd edition, Oxford.
- Easterling, P. E. (1982). *Sophocles Trachiniae*, Cambridge.
- Elmsley, P. (1821). *Euripidis Bacchae*, Oxford.
- Henderson, J. ed. (2000). *Aristophanes*, Vol. III, Harvard.
- Hirschig, G. A. ed. (1856). *Erotici Scriptores: Parthenius, Achilles Tatius, Longus, Xenophon Ephesius, Heliodorus, Chariton Aphrodisiensis, Antonius Diogenes, Iamblichus*, Paris.
- Jebb, R. C. (1893). *Sophocles: The Plays and Fragments*, Part. I The

- Oedipus Tyrannus, 3rd edition, Cambridge.
- Kamerbeek, J. C. (1959). *The Plays of Sophocles: Commentaries*, Part II
The Trachiniai, Leiden.
- Kamerbeek, J. C. (1984). *The Plays of Sophocles: Commentaries*, Part VII
The Oedipus Coloneus, Leiden.
- Kannicht, R. ed. (2004). *Tragicorum Graecorum Fragmenta*, Vol.5.2 Euripides, Göttingen.
- Kirk, G. S. (1970). *The Bacchae*, Cambridge.
- Kopff, E.C. ed. (1982). *Euripides: Bacchae*, Leipzig.
- Kovacs, D. ed. (1994). *Euripides*, Vol. I, Harvard.
- Kovacs, D. ed. (2002). *Euripides*, Vol. VI, Harvard.
- Kühner, R. and B. Gerth. (1966). *Ausführliche Grammatik der Griechischen Sprache*, Teil II, 3rd edition, Hannover.
- Liddell, H. G., R. Scott, and H. S. Jones. ed. (1996). *A Greek-English Lexicon*, 9th edition, Oxford.
- Lloyd-Jones, H. ed. (1994). *Sophocles*, Vol.I, Harvard.
- Lloyd-Jones, H. ed. (1994). *Sophocles*, Vol.II, Harvard.
- Lloyd-Jones, H., and N. G. Wilson. edd. (1990). *Sophoclis Fabulae*, Oxford.
- Oranje, H. (1984). *Euripides' Bacchae: The Play and Its Audience*, Leiden.
- Rijksbaron, A. (1991). *Grammatical Observations on Euripides' Bacchae*, Amsterdam.
- Roux, J. (1972). *Les Bacchantes*, Tome II, Paris.
- Sandys, J. (1900). *The Bacchae of Euripides*, 4th edition, Cambridge.
- Seaford, R. (1997). *Euripides: Bacchae*, Warminster.
- Segal, C. (1982). *Dionysiac Poetics and Euripides' Bacchae*, Princeton.
- Schwyzler, E. (1966). *Griechische Grammatik*, Band II, 3rd edition, München.
- Taplin, O. (1978). *Greek Tragedy in Action*, London.

Verrall, A. W. (1910). *The Bacchants of Euripides and Other Essays*, Cambridge.

Wilson, N. G. ed. (2007). *Aristophanis Fabulae*, Tomus II, Oxford.

Winnington-Ingram, R. P. (1948). *Euripides and Dionysus: An Interpretation of the Bacchae*, Cambridge.

エウリーピデース、『バッカイ—バックスに憑かれた女たち』、逸身喜一郎（訳）、岩波書店、2013年。

エウリーピデース、『ギリシア悲劇 IV エウリピデス（下）』、松平千秋（訳）、筑摩書房、1986年。